

猫と人間が共生する社会

前田ひかり

本論文では猫と人間の関係性の変化を歴史的観点から紐解き、今後猫と人間が共生する社会を作り上げるために、現在日本ではどのような取り組みが行われているのか、また海外ではどのような社会の仕組みになっており、どのようにして殺処分の問題に取り組んでいるのかを明らかにした。

第1章では、猫と人間の関係性について、役割を持つ人間の道具とも言える存在から愛玩動物として愛で可愛がる存在へ、そして人間と同等の家族の一員として共に生きる存在へと変化していく様子を歴史的観点から紐解いた。猫と人間が近づき、共生する身近な存在になっていく一方で、捨てられたり繁殖させられたりと人間の身勝手な行動に振り回される猫の存在も明らかにした。

第2章では、猫の殺処分について調べ、殺処分数のこれまでの推移や近年は減少傾向にあること、保健所や動物愛護センターが引き取る猫の半数以上が所有者不明の猫であり、殺処分を行わずに新たな引き取り手を見つけるためには民間の動物愛護団体の協力が必要不可欠であることを明らかにした。

第3章では、殺処分防止に関する各国の取り組みについて事例をあげて比較検討した。日本では行政と地域が連携して、殺処分の実態や猫の生態について周知させることや TNR 活動に取り組み、「生きているもの同士やさしさをもち、人間と猫のどちらにも住み心地の良い環境をつくる」ことを目標としていた。ドイツでは行政より民間の職員とボランティアが動物の愛護に力を注いでいる印象を受けた。ギリシャでは動物愛護の急速な前進に注目し、気候や国民性を活かした TNR 活動を行っていた。フランスでは多くのペットが遺棄されるという問題に国として向き合い、法律を改正するという大きな決断に至った背景を調べた。

第4章では、現代の日本における猫の社会的に位置づけを様々な視点から明らかにした。猫付きの住宅の存在やペット葬儀が主流になっていることから、ペットの家族化が進んでいることが明らかになった。また、猫カフェの多さやインフルエンサー猫の存在から、猫が人間の癒しの存在として市民権を得ていることが伺えた。

本研究から、可愛さと自由奔放さを兼ね備えた「猫」という存在に魅力を感じ心奪われる人が多い一方で、猫は犬のような主従関係が発生しないため、責任を持って飼養管理するという意識が薄まっている現状も読み取ることができた。動物を「モノ」としてではなく、価値ある「共生する存在」として多くの人々が認識するためには、個人やボランティア団体だけではなく、行政や国が主体的に呼びかけ意識改革をすることが重要である。